

国文学研究資料館ニュース

No.6
Winter
2007

『諸国産紙問屋』

目 次

■ 春季特別展の御案内2	■ トピックス5
■ お知らせ3	秋季特別展・シンポジウム
遠隔地の方への資料利用サービス	連続講演
「日本古典籍総合目録」の公開	第30回国際日本文学研究集会
閲覧業務の休止	■ 大学院教育7
通常展示	日本文学研究専攻入試説明会
	■ コラム「西鶴・国文研・パリ」8

春季特別展の御案内



展示資料紹介「紙の着物」



扇子



紙製壺



ポチ袋貼込帳の一部

テーマ 幻の博物館の“紙”

—「日本実業史博物館」旧蔵コレクション展—

期 間：平成19年5月28日(月)～6月15日(金)

場 所：国文学研究資料館 2階展示室

幻の「日本実業史博物館」資料のうち、「紙・製紙」に関するものを展示します。また、国立民族学博物館の資料を借用して展示する予定です。

今回の展示は人間文化研究機構連携研究「日本実業史博物館資料の高度活用」の研究
成果中間報告も兼ねています。

日本実業史博物館は、なぜ幻の博物館か？

日本実業史博物館は、昭和6年(1931)11月の渋沢栄一没後まもなく、栄一の嫡孫で渋沢財閥の後継者であった渋沢敬三が中心となって、その実現が図られました。

敬三が思い描いていた博物館は「渋沢青淵翁記念室」・「近世経済史展示室」・「肖像室」から構成され、特に渋沢栄一の生きた時代を扱う「近世経済史展示室」が重視されていました。そうした意図の下で、江戸時代の文化・文政期から明治に至る日本の「経済史上最も画期的変化ノアリシ」時代の経済変遷や発展過程を具体的に表す文書から絵画・写真・物品に至る幅広い資料の

収集が行われました。

しかし、この博物館構想は、第2次世界大戦中の経済統制及び戦局の悪化、さらには戦後の財閥解体などによる社会の激変により実現されることなく断念されました。

日本実業史博物館の設立が断念された後、収集したさまざまな資史料は、渋沢敬三が設立を推進した文部省史料館(旧・国文学研究資料館史料館の前身)に、昭和26年(1951)に一括寄託されました。そして、渋沢敬三が没する前年の昭和37年(1962)9月、正式に寄贈となり現在に至っています。

表紙絵解説「諸国産紙問屋 兵庫本町通 南條莊兵衛(広告)の一部」

『日本実業史博物館資料』「器物の部」のうち、「伊勢辰コレクション」に含まれる広告の一部。同コレクションは、江戸千代紙の店『伊勢辰』が収集したもので、昭和14年に「日本実業史博物館設立準備室」が購入した。当時の集計で263件、価格は1936円。(器物08-011-15-005)

お知らせ

遠隔地の方への資料利用サービス

当館では、直接来館できない利用者のために、以下のようなサービスを行っています。平成19年1月から3月まで、アスベスト工事のためにサービスを休止していましたが、4月から再開します。再開に当たって、図書館等への貸出については、従来の、紙焼写真本・図書の合計10冊以内から、紙焼写真本10点20冊、図書10冊（合計30冊）以内に拡大します。

■ 図書館相互協力（ILL）による 複写・貸出サービス

- 所属機関の図書館を通じて、以下のサービスを行っています。図書館間ネットワークにより、迅速なサービスが受けられます。
- 大学等に所属されていない方は、公共図書館への貸出も可能です。お近くの公共図書館にご相談ください。

文 献 複 写

必要事項（資料名・請求記号・複写部分・複写方法など）を確認し、所属機関の図書館等にお申し込みください。

料金の請求、複写物の送付等は図書館を通して行います。

貸 出

資料の一部については、利用者の所属する図書館に貸出をし、図書館での閲覧ができます。（*但し、原則として東京都外の機関に限ります。）

対象：紙焼写真本（サービス区分により貸出できないものがあります。）・図書（他館では入手困難な資料のみ。貴重書・和装本・劣化資料を除く。）

冊数：一機関当たり紙焼写真本10点20冊・図書10冊（合計30冊）以内

期間：貸出・返却にかかる郵送期間も含めて30日間以内

■ 個人で直接複写申込

- 直接、郵送又はFAXにより複写申込をすることもできます。下記の事項を資料複写申込書（当館ホームページの閲覧利用案内 <http://www.nijl.ac.jp/~jyousa/etsuran.html> からダウンロードできます。）に記入して、情報サービス係にお申し込みください。
- 料金をご連絡しますので、現金書留でご郵送ください。折り返し複写物をお送りします。

【申込に必要な情報】

氏名・住所・電話番号（FAX番号、メールアドレス）*電話番号等は通信欄に記入してください。

資料名・請求記号・配架場所・複写部分・複写方法（論文の複写申込の場合は巻号、論文名、（著者名）も記入してください。）

国文学研究資料館

問い合わせ及び申し込み先

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国文学研究資料館 管理部事業課

情報サービス係

〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10

電 話 03-3785-7131 内線264

FAX 03-3785-7805

メール etsuran@nijl.ac.jp

●「日本古典籍総合目録」の公開

昨年末、当館ホームページの〈電子資料館〉から「日本古典籍総合目録」(Union Catalogue of Early Japanese Books)を公開しました。

これまで公開していた「国書基本データベース(著作編)」と「古典籍総合目録データベース」を統合・拡張し、約100万件のデータを検索できるようにしたものです。

これにより、従来の二つのデータベースは停止します。長い間ご利用いただきまして、ありがとうございました。今後は、当データベースをご活用ください。

当データベースは、日本の古典籍の総合目録です。『国書総目録』(岩波書店刊)の継承・発展を目指して構築した、いわば「新国書総目録」ともいえるべきものです。

古典籍の書誌及び所在についての網羅的な情報を、著作及び著者についての情報(典拠情報)とともに提供しています。

また、『国書総目録』所載の所在・翻刻複製についての情報(写本、版本、活字・複製・謄写本の情報)を併せて表示しています。

これらの書誌情報は、全国の大学・図書館・文庫、その他の所蔵者のご理解のもとに、データを採録させていただいています。所蔵者の皆様には心より御礼申し上げます。

今後もデータの蓄積に努めて参りますので、よろしくお願いいたします。



●閲覧業務の休止

ただいま、アスベスト含有建材の撤去工事のため右のとおり閲覧業務を休止しておりますので、皆様方のご理解、ご協力のほど、お願いいたします。

休止期間：平成18年12月27日
～平成19年4月1日

休止する業務

- ・資料の来館利用(閲覧、文献複写)
- ・相互利用(文献複写、現物貸借、郵送による文献複写)
- ・資料撮影掲載
- ・展示貸出

通常展示

和書のさまざま — 書誌学入門 —

和書の形態をわかりやすく紹介する書誌学入門展示です。

第一部では「装訂」「書型」「本の各部」「料紙」について、
第二部では「写本」「版本」「本以外の資料」について、
具体的かつ体系的な解説を施しております。

基礎から書誌学を学びたい方だけでなく、和書を楽しむすべての皆様に御覧いただければ幸いです。

日 時：平成19年4月16日(月)～5月18日(金) 10:00～16:30

場 所：国文学研究資料館 2階展示室 <入場無料>

トピックス

●秋季特別展・シンポジウム

当館では、平成18年10月17日（火）から11月2日（木）まで、秋季特別展「^{ROBIN}仮名垣魯文百覧会」を開催しました。当初は13日間という開催日数でしたが、好評のため11月9日（木）、10日（金）も臨時に開催し、総計約1,000名の観覧者があり、連日、展示室は活況を呈していました。今回の展示は、幕末・明治開化期文学に照明を当てたもので、当館が近代部門を設けて以来初めての、関連分野の蒐書展示となりました。また、会期中の10月20日（金）に行ったシンポジウム「江戸から明治へー^{あらや}仮名垣魯文を中心としてー」でも多数の参加者があり、会場からの熱のこもった質問を交え、有意義な討論を行いました。

今回の展示は、他館や個人の蔵書家からのご協力のもとに成り立っておりますが、とりわけ、毎日新聞社新屋文庫より貴重な資料の数々をお借りしました。展示期間中には、偶然、新屋文庫が毎日新聞社に収められる際にご尽力された故・杉浦正氏夫人の杉浦雅子氏がご来館され、数日後には仮名垣魯文の曾孫にあられる池田脩氏がお越しになるなど、展示によってもたらされたご縁に、スタッフ一同喜びの色を隠せませんでした。写真は、お二方を交えての懇談会の一コマです。当日、杉浦氏・池田氏から伺った貴重なお話は、追ってプロジェクト成果報告書等にて取りまとめる所存です。



展示室の様子



シンポジウムの風景



杉浦雅子氏と池田脩氏



デジタル展示の様子

・デジタル展示

ここ数年、当館の展示ではパソコンを使ったデジタル展示の取り組みを積極的に行っています。秋季特別展でも、モニタ上で仮想的に挿画を動かしたり、弁士の語り口調で朗読した音声付きの画像をスライドショーで見いただくなどの多彩なコンテンツを設けました。講談風の語りを懐かしく聴き入る方も多く、研究者からも高い評価を得ました。

●連続講演

当館では、平成12年度から毎年、全5回の連続講演会を開催しています。

今年度は、「王朝物語山脈の眺望」と題して、神野藤昭夫氏（跡見学園大学文学部教授）に講師をお願いしました（平成18年9月～11月）。例年聴講の申し込み者が多く、今回も多数の中からの抽選となり、毎回150名前後の参加者がありました。

神野藤氏は、平安時代を中心とした物語の流れを、わかりやすく具体的に語ってくださり、参加者は巧みな語り口を聞き入りました。第3回目にはエントランスに展示ケースを設置し、当館が所蔵する貴重な古典籍を見ていただきました。

また、最終回では、神野藤氏が参加者の前で狩衣姿となる過程を実演し、その姿のままで講演していただくなど、王朝の香り漂う中での講演会となりました。



狩衣着装実演の様子



狩衣姿で講演する神野藤氏

●第30回国際日本文学研究集会

第30回国際日本文学研究集会を、平成18年11月9日(木)、10日(金)の2日間にわたって開催しました。

今回は、「表象と表現」というテーマをめぐって、13人の研究発表、4人のポスターセッション発表と Mostafa Ahmed Mohamed Fathy 氏（エジプト・カイロ大学助教授）の公開講演といった、合計18人ももの発表・講演が行われるという、充実したプログラムでした。

参加者は136人、そのうち海外及び国内に在住の11ヶ国の外国人研究者計33人が参加しました。活気あふれる研究発表と、会場における活発な質疑応答は、参加者に多くの刺激を与えることができました。

海外における日本文学研究者との交流と、国内に滞在する留学生の支援を目指して行っている本集会は、今年で30回目の開催となりました。多くの参加者から、本集会の日本文学研究における国際化の促進に対する貢献が高いことを評価されました。



講演するMostafa氏



質疑応答の様子

大学院教育

●日本文学研究専攻入試説明会

総合研究大学院大学文化科学研究科の日本文学研究専攻（博士後期課程）は、当館を基盤機関としている大学院です。日本文学研究専攻に入学した大学院生は、当館において講義等を受け、当館に所属する教員から研究指導を受けることになります。現在、日本文学研究専攻には12名の大学院生及び1名の研究生が在籍して、研究と論文執筆を行っています。

今年度も、12月に願書を受け付け、2月に面接審査等を行います。それにあわせて、10月13日（金）の15時から、当館において、日本文学専攻（大学院博士後期課程）の入試説明会を行いました。これに先だって、13時から、法政大学教授田中優子氏による講演「江戸文学が残したもの－樋口一葉の実例より－」が開催されました。本来はこれも入試説明会の一環として企画したのですが、この講演は一般の方々の来聴も可としましたので、当日は100人以上の来聴者で会場は満員となりました。田中優子氏は江戸文化の研究者として著名な方で、『江戸の想像力』をはじめとする数々のご著書があり、テレビ番組にも出演されています。ご講演では、本の挿絵などの画像を見せながら、樋口一葉がどのような生涯を送ったか、またその作品『たけくらべ』などに江戸文学がどのように影響しているかなどについて、わかりやすく印象的な語り口で語られました。『たけくらべ』は、当時の芸能が見渡せるミュージカル小説である、というあたりでは、田中氏のお話から、当時の音が聞こえてくるような気がしました。また当館との関わりについても触れられ、「国文研に来るのは少し久しぶりですが、インターネットでは毎日のように訪問しています」ということも述べられました。

続いて15時から、大学院の入試説明会が行われ、修士課程の大学院生など9名の参加がありました。はじめに会場

で総研大の説明、入試についての説明などが行われた後、教員の案内で館内を見学し、通常は見られない書庫なども含めて、館内を見て回りました。そして総研大に在学中の大学院生達と懇談会を行った後、自分が相談したい教員の研究室を、各自が自由に訪問しました。当日のアンケート結果によると、館内見学や教員研究室訪問は、大変満足度の高いものだったようです。

来年度も、入試説明会を実施する予定です。詳細については、来年度になってからホームページなどでお知らせいたしますので、ご関心のある方は是非ご参加ください。



田中優子氏の講演会



入試説明会

コ ラ ム

西鶴・国文研・パリ

Daniel Struve(ダニエル・ストリューブ)
フランス・パリ第七大学助教授

国文学研究資料館の客員研究員として六ヶ月間滞在して研究を進められたのは本当に有り難い有意義な経験だった。二年前の国際日本文学研究集会に参加させていただいた時に発表テーマに選んだ「西鶴と『徒然草』との関わり」という研究テーマは昔から興味を持っていて、いつか真剣に考えたいと思っていた問題だった。

大学などの雑用を離れて、パリではなかなか揃わない定期刊行物や豊富に集められた江戸時代の資料に至るまで、ほとんど無限に思われる資源を自由に使って、恵まれた環境で過ごすことができた。この六ヶ月間は夢にも思わなかったうれしい機会だった。広いテーマを『好色一代女』の一作品に絞り、資料館の利便を活かしてできる限り徹底的に調べることができた。

私の研究に役立ったのは資料だけではなく研究者同士との交流の機会が設けられたことであった。西鶴や他の日本文学の専門家たちに調べてもらったりして、いろいろ刺激を受け、自分の

研究をより正確に現在行われる西鶴や江戸文学の研究の流れに位置づけることができたかと思う。特に8月23日、24日と二日間続いて開かれた共同研究と西鶴研究会の会議は、忘れがたい充実した時間だった。

桜の満開に少し遅れて肌寒い四月の上旬に来日してから、忙しいだけに季節は速やかに変わっていくように感じられた。例年よりやや長い梅雨や案外に凌ぎやすい八月の暑さの後から、あっという間に秋の兆しが歴然する九月になった。これから帰るパリ第七大学も引越しが寸前に迫ってきた。それと同じように、資料館も戸越を去って立川に移って新しい段階を迎えようとしている。どこも変化が激しい時代のような。豊かな木立に包まれた、静かなこの戸越の敷地は惜しまれてならないが、今後の繁栄を祈ってやまない。

蝉しぐれやこおろぎの鳴き声を耳にしながら、コンピュータに向って読書や執筆に耽って過ごした日や夜は、私の記憶の中に長くとどまるだろう。

表紙絵解説の訂正

前回発行分(No5)の表紙絵(近世水滸伝)の解説文に誤りがありましたので、以下に正しい解説を掲載します。

「平手壹岐(ひらでいき) 市川小団次」大判錦絵、文久2年(1862)7月改印。3代目歌川豊国画。仮名垣魯文暗記の略伝。講釈『天保水滸伝』では、北辰一刀流(ほくしんいっとうりゅう)の達人平手造酒(ひらてみき)。千葉周作門下であったが破門され、笹川繁蔵の客分となる。天保15年8月の飯岡一家の殴り込みの際、大勢を相手に防戦し死ぬ。似顔で描かれる4代目市川小団次は、この時は座頭(ざがしら)も勤めるほどの人気と実力を持ち、特に下層階級の人物を写すことに優れていた。



国文学研究資料館ニュース No. 6

発行日 平成19年 1月29日
編集 広報委員会
発行 人間文化研究機構 国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10
TEL:03-3785-7131 Fax:03-5751-7166 <http://www.nijl.ac.jp>
印刷所 有限会社 スミダ

©人間文化研究機構 禁無断転載

当館では、古典籍及び図書の寄贈を受け付けております。御刊行・御所蔵の資料を広く研究に活用させていただくために、皆様のご協力をお願いいたします。

例えば、本の右開きと左開き

そのことに気づいたのは、2004年10月、イスタンブールにあるトルコ共和国総理府オスマン文書館の閲覧室であった。当時イスタンブールに留学していた澤井一彰氏（東大院生）に案内してもらい、オスマン帝国政府の財政帳簿を説明してもらっている時であった。

横書きであるのに何か違和感がある。それは帳面が右開きであったからである。オスマン語はアラビア文字を右から左方向に書く。文字を読む視線の移動方向が大雑把に言えば、東アジアの縦書きと同じだから帳面の作りも同じ右開きになるのであろう、と妙に納得してしまった。

その後は、冊子形態のものをを見せてもらった時は、文書であれ典籍であれ開き方をチェックしていた。オスマン語で書かれたものは全て右開きであった。本の開き方が東アジアと同じというだけで親近感を覚えていた。と、同時に、東アジアにおける本が右開きであるのはたんに縦書きだからというわけではなさそうであることにも気づかされた。とすれば、縦書きだから右開き、横書きだから左開き、という思い込みは東アジアと欧米しか視野に入っていない通念にすぎないということになる。

今年になって読んだ本のなかに、中央アジアのパクパ文字が紹介されていた。パクパ文字は縦書きだが、行は左から右に移動するのだそうだ。もしもその言語世界に冊子があれば、これまでの話の延長からは、パクパ文字で書かれた本は西欧と同じ左開きになるはずである。そのうち調べてみたいと考えている。

本が左開きか右開きか、などという些細なことはそれぞれの地域にとっては自明の事であり、普段は気にも留めない。しかし、地球上のあちこちの地域を比べてみると、



オスマン皇帝のワクフ(寄進)文書を説明するクルト教授。この冊子もむろん右開きである。

自明の些細なことでも相違が見られ、なぜなのかという疑問が自然と湧いてくる。

「歴史的アーカイブズの多国間比較研究」プロジェクトは、そうした素朴な疑問を大切にしている。

国文学研究資料館アーカイブズ研究系では、三つのプロジェクトが行われており、そのうちの一つが「東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究」である。このプロジェクトは二つのサブ・プロジェクトにより構成され、その一つがここで紹介する「歴史的アーカイブズの多国間比較研究」である。通常の予算では全くの資金不足であるため、外部資金の獲得に努めた結果、科学研究費補助金・基盤A「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」（研究代表者渡辺浩一、2004～2008年度）の成果を利用する形で行うこととなった。

このプロジェクトの対象地域は日本・韓国・中国を中心として、トルコと西欧に及ぶ。対象時期は日本史の時期区分で言えば中世と近世が中心となる。これは朝鮮・明清・オスマン朝の時期と合わせたためである。研究目的は日本の中近世史料の特質を世界各地の史料と比較することによって明らかにしようとするものである。別の言い方をすれば、具体的なモノとしての史料を共通の素材としながら、研究交流を試みてみようということである。

対象地域が欲張りすぎの感もある。第一段階としては東アジアに限定するというのが自然な発想ではある。しかし、例えば Richard Britnell ed., *Pragmatic Literacy East and West: 1200-1330*, Woodbridge, 1997 という全世界比較史料学の試みがすでにヨーロッパでは行われており、それが非ヨーロッパ世界に関する情報不足と、無邪気なヨーロッパ中心主義に制約されて、甚だお粗末な内容となっている。こうした状態を是正するためには、東アジアの側から西欧も含めた全世界比較史料学を構想するとどのような違った姿になるのかを早急に提示する必要があるのである。したがって、最終的な研究成果の公表は英語でもなされなければ意味がない。

研究対象地域にトルコを含めたのは、現在日本のイスラーム史研究の急進展によって旧来のアジアとヨーロッパという二元論が克服されつつあることから学び、比較の「参照系」ⁱを多元化するために対象地域としてイスラーム世界は不可欠と考えたからである。その場合、東アジアとの比較を念頭におくと、イスラーム世界のなかで西欧諸国の植民地にならずに近代を迎えたオスマン朝を選択することは必然的であった。

次に、予定している五回の国際シンポジウムのうち、すでに三回が終了しているのでその内容をごく簡単に紹介しておきたい。

第一回は 2004 年 11 月 22・23 日に韓国の国史編纂委員会において行われた。会議運営は田美姫^{チョン・ミヒ}氏が行い、報告の組織者は金炫栄^{キム・ヒョニョン}氏であった。須川英徳氏（横浜国立大学）の協力も得た。そのテーマは「近世東アジアにおける組織と文書」である。アーカイブズ学における出所 provenance 概念にもとづき、文書を授受作成する組織体に注目し、韓国と日本を主とした比較を行った。

そこでは豊富な成果が得られ、特に以下

の二点が重要であった。第一には科学の有無が規定する文書の作成と管理の特質という点である。つまり、在地社会における文書の作成と管理について、日本近世では行政制度に位置づけられた村役人が行うことに対し、朝鮮と中国にあっては行政制度外



国史編纂委員会が整理した両班文書を原蔵していた尹氏の屋敷。

の存在である在地知識人（両班・生員ⁱⁱ）の役割が大きい、ということである。第二には、日本近世と比較すると、朝鮮では人間活動の遂行と同時に発生する文書は一定の期間だけ保管され、史料は二次的な編纂物として後世に伝わる傾向があるため、現在のアーキビストや歴史研究者が実際に扱う史料の質と量においてかなりの違いがある、ということである。

この研究会の成果は、アーカイブズ研究系としては『国文学研究資料館アーカイブズ研究系プロジェクト「東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究」2004年度報告書 近世東アジアの組織と文書』（2005年3月）を刊行し、科学研究費としては『「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」年次報告書 平成16年度』（2005年3月）を刊行している。

第二回目は上海で行った。臼井佐知子氏（東京外国語大学）と王振忠氏（復旦大学）を中心に会議は組織化された。東京外国語大学21世紀COEプログラム「史資料ハブ

地域文化研究拠点」と復旦大学中国歴史地理研究所も主催団体に名を連ねた。

その趣旨は以下の通りである。第一に、韓国では国家・社会を構成する各レベルの組織体において比較の対を作り、史料作成・管理の様相や組織体そのものを比較したが、上海では史料の出所である組織体よりも具体的な史料の存在に光をあてようとした。第二に、韓国では上は王朝政府から下は村落までまんべんなく諸要素を取り上げたのに対し、上海では世界的に有名な徽州文書ⁱⁱⁱを中心として、国家・中央というよりは社会・地域に重点を置くこととした。このような趣旨のもと「東アジアにおける文書資料と家族・商業および社会」というテーマを掲げ、九本の報告と三つのコメントが行われた。九本の報告は最後の総括において以下のようにまとめられた。

一つのキーワードは「契約関係」である。これは、個人と個人、あるいは家や村落という集団内部における広い意味での契約関係が、様々な種類の文書資料の作成と保管をもたらし、それは他者との争い＝裁判の準備ともなったという点である。



徽州黄山市の骨董品店で見かけた契約関係文書

もう一つのキーワードは「社会管理」である。これは、都市や商業に関わる社会管理が特定の媒体によって行われるが、それが必ずしも貫徹しないという点である。

さらに、以上二つの論点をつなぐ報告が、

阿風(中国社会科学院歴史研究所)「明清徽州訴訟文書の分類」であったと位置づけられるのではないかと。ここでは、裁判資料の官府における保管、それを写し取る民間社会、さらにそれを公証する官府という文書資料をめぐる社会管理者と社会の相互作用もしくは情報の循環構造が描かれたと思われるからである。

紙幅の関係で十分には紹介できないので、詳しくは『史資料ハブ地域文化研究』7号(2006年3月)を参照されたい。

第三回目は、2006年9月に開催された国際シンポジウム「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」である。ここでは、ビルゲント大学のオゼル・エルゲンチ教授(オスマン史)とアンカラ大学のジャン・エルキン準助教授(日本史)、林佳世子氏(東京外国語大学)の多大な協力を得た。

ここでの五つの報告から私が考えたことは以下の二つである。一つは、日本における歴史的アーカイブズの大量現存の理由についてである。日本側の二つの報告に共通する論点の一つは家の問題であった。高橋一樹「日本中世における裁判文書の作成・保管—武家文書を中心に—」からは、武士の家の成立と展開が文書伝来の前提条件となったことが読み取れ、さらに寺院社会の基礎単位も院家^{いんけ}という擬制的な家であったことが指摘されていた。大友一雄「江戸幕府の組織構造と情報管理—奏者番職を中心に—」では、江戸幕府奏者番職の業務が、それに就任した大名の家を挙げて遂行されていたことが示された。

日本では、近世前期、とりわけ17世紀後半になると、全国的に、また全社会層において家が成立すると言われている。これが、史料大量現存の理由の一つであることは間違いない。日本においては、中世近世史料総点数は数えることが不可能であるくらい、

大友報告によれば近世だけで1000万点の史料が現存しているが、そのほとんどは大家文書・村役人文書・商家文書といった家文書という形で存在しているのである。これに対して、オスマン社会における在地文書の希少さについては、オゼル・エルゲンチ「社会史研究におけるオスマン朝文書史料利用の可能性」において明らかである。在地社会の状況は、カーディー^{iv}のもとでのシャリーア法廷^v台帳によってのみしか窺うことができないのであった。また、私文書の希少さについては、ユルマズ・クルト「オスマン朝の地方行政と文書史料」の末尾にあったように、オスマン朝後期の有名な家系にあっても19世紀の史料しか現存しないとのことである。しかし、日本における家の全面展開は史料大量現存の前提条件にすぎず、さらなる説明が必要となる。

二つめは、オスマン朝における文字社会と無文字社会の亀裂という点である。

クルトおよびヒュルヤ・タシュ「オスマン朝の中央体制と文書史料」の二つの報告を聞いて、オスマン朝社会は、表面的には、情報の蓄積を国家に依存している印象を最初は持った。しかし、エルゲンチ報告を聞くと、それは文字の世界だけのことであって、その背後には村落や都市の街区における口頭による情報蓄積の世界が分厚く存在した。つまり、オスマンの国家レベルでは前近代における究極の文書主義が存在する。非常に整然とした文書行政の世界である。これは日本近世に類似する。しかし、支配される側は全く文書・文字を用いない。これは日本近世とは正反対の状況である。日本近世社会では、支配層と被支配層が文字という共通の手段によって情報世界を構築している、あるいは情報世界が連続していると表現してもよいのかもしれない。これに対して、オスマン朝では、情報世界が支配層と支配される階層の両極に分裂してい

るようにも見える。

これまでの三回の国際シンポジウムを経て、つくづく痛感させられていることは、日本における前近代アーカイブズの異常なまでの豊富さである。これまで、日本のアーキビストや日本史研究者はこのことにあまり自覚的でなかったが、地球上の各地域の歴史研究者やアーキビストにはとても奇異に感ぜられるようで、どうしてそんなにいいのか、と質問される。なぜ不要と思われる文書まで特に近世においてきちんと保管してきたのかについての説得的な説明は今のところできないでいる。

第四回は、2007年6月に、岡崎敦氏（九州大学）とオリヴィエ・ギョジャン教授（国立古文書学校）を中心に、パリにおいて国家・宗教組織・都市・商業といった各レベルにおける文書管理の比較史を行う予定である。最後に同年12月に東京で総括的な公開シンポジウムを行う予定であるので、関心をお持ちの方々の参加をお願いしたい。

（文責：渡辺浩一）

-
- i 三浦徹『イスラームの都市世界』（山川出版社、1997年）
 - ii 両班は朝鮮における支配身分であり、科挙に合格し中央官僚を輩出した家が獲得する社会的身分、在地に居住する。生員は中国における社会的身分の一つであり、科挙の第一段階である学校試に合格し、後の省や中央での試験を受験できなかったり、受験しても不合格となったりした者であり、在地に居住する知識人のことである。
 - iii 徽州文書とは、中国安徽省南部（徽州）で歴史的に受け継がれてきた一紙もの及び簿冊からなる、地方行政機構の文書と、土地売買文書や金銭貸借文書などの宗族文書を含めた民間文書のことであり（臼井佐知子『徽州商人の研究』汲古書院、2005年）、その総数は50万件を下ることはないと考えられている。
 - iv 地方の司法および行政を司る官吏。
 - v 地方の裁判所・行政機関。その長がカーディー。